

## 臨床心理学関連授業における反転授業の取り組み

Flipped Classroom Initiatives in Clinical Psychology-related  
Classes

長岡 由紀子

愛知みずほ大学人間科学部

Yukiko NAGAOKA

*Faculty of Human Sciences, Aichi Mizuho College*

## 要旨

臨床心理学領域の学びは心理的な支援技法を体験的に理解することが求められ、アクティブラーニングによる能動的な学習が有用になるのではないかと考えられる。しかしながら、臨床心理学領域の学びにおけるアクティブラーニングを取り入れた授業方法に関する具体的な報告は限られている。そのため、本稿では臨床心理学関連の授業で取り組んだ反転授業形式によるアクティブラーニングの実際について報告し、臨床心理学領域における反転授業の実施の意義について検討を行うことを目的とした。この目的のもとに「心理学的支援法」を受講した27名の学生を対象としたアンケートと授業の振り返りを検討した結果、授業に対する学生の興味や達成感などはおおむね得られるものであった。特に、動画予習により事前に知識が得られていたためか、ディスカッションでの話し合いがスムーズに始められる傾向がみられたが、ディスカッション内容の深まりや広がりについては、授業方法としてより工夫が求められることが明確になった。本稿の検討を通して、学生が事前の動画予習で得た知識を授業時のディスカッションで活用することは、心の対人援助に関する専門用語を実際の対人関係の中で活用する機会にもなるため、実践的な学びとして有効であることが考察された。ここに臨床心理学領域において反転授業を導入する意義が見出された。

キーワード:反転授業;臨床心理学;アクティブラーニング

Key Word : Flipped classroom; clinical psychology; active learning

## I. はじめに

## 1. 臨床心理学領域の学びの特徴

臨床心理学は、河合(1995)が「きわめて実際的な要請を受けて出現してきた学問」と述べるように、心理的な実際問題にどのように対応するかという、実践的な側面を有することが特徴とされる領域である。すなわち、対象者とのかかわりを通じた知見を扱うため、「完全な対象化は不可能」となる。そのため、適切な「関係性」を保つために、学習者はみずから「訓練」をする必要があることが述べられている。

この「訓練」という言葉が用いられる背景には、臨床心理学を専門とした学びは「体験知」を身につける必

要があることと関係する。学習者は「体験知」を通して心の援助者としての実践力を身につけることになるが、この際に体験されたことへの理解が、主観に偏った独断的なものに陥ることのないよう、「関与しながらの観察」(Surrivan, 1954/1986)<sup>註1)</sup>的な姿勢から体得されることが肝要となる。

## 2. 教育実践としての反転授業

「能動的学習」や「積極的学習」などと訳される、アクティブラーニング(active learning)は、1970～80年代頃から徐々に使用されるようになり、1990年代以降には初等・中等教育を中心に、高等教育においても広く使用されるようになった。2000年以降は、研究や実践は

大幅に増加している(溝上,2014)。このようなアクティブラーニング型の授業の一つとして、反転授業が位置付けられている。反転授業は、「従来、教室で行われていた授業での学習と、演習や課題など宿題として課される授業外学習を入れ替えた教授学習の様式」と定義され(Lage, Platt, & Treglia, 2000)、学習者の主体性がより求められるものである。反転授業の主な特徴として、溝上(2017)が述べたものを表1として以下に示すが、これらの特徴が実際に活かされるためには、教員による十分な準備のもとで行われる必要がある。

表1 反転授業の特徴

①学生は自分のペースで学習できる。
②学生は繰り返しオンライン教材を視聴でき、理解をより確かなものに行うことができる。
③授業外学習時間が増加する。
④対面教室でアクティブラーニングに多くの時間を割ける。

出典：溝上(2017)をもとに作成

### 3. 臨床心理学領域の学びにおける反転授業

反転授業を用いた授業実践は、文系・理解を問わず、さまざまな大学専門科目において行われて、報告や研究がなされている。

基礎心理学に位置づけられる科目では、心理学実験の科目でビデオ教材を用いた反転授業を導入することにより、実験の手続きの説明や欠席者への対応が効率よく行われるようになったことが報告された(2017,島田)。演習科目である心理学測定法の授業でビデオや教科書による予習課題を用いた反転授業を行った報告からは、個人で行う予習の取り組みは認められるが、その取り組みが授業内で行う班別の取り組みに反映されているとはいえないことが示唆された(2018,藤田・芳賀・加藤,2018)。また、応用心理学に位置づけられる臨床心理学関連科目における反転授業の報告は限られており、演習系のアセスメントの授業での報告がみられるが、オンライン形式における資料配布による授業であり、実際の学生の取り組みの現状については示されていない(2021,高石)。

以上のように、臨床心理学領域における科目の反転授業の取り組みに関する報告は十分にされているとはいえない。

#### 4. 目的

そこで本稿では、令和5年度の「心理学的支援法」の科目で実施した反転授業の方法および受講学生からのアンケートより、臨床心理学関連科目としての反転授業の方法について検討することを目的とする。

## II. 方法

### 1. 授業の概要

令和5年度の「心理学的支援法」の授業において、反転授業を取り入れた授業を実施した。本科目は公認心理師資格に関するカリキュラムの科目であり、かつ本学では3年次科目に位置づけられていることから、心理的援助についてより専門的な学びが課された科目となっている。

### 2. 対象データ

本論文で検討の対象とするデータは、第15回目の授業において、本論文執筆に関する承諾が得られた27名(男性8名,女性19名)によるものである<sup>註2)</sup>(以下、授業の回数は「#1」のように、#付で表記する)。その上で、対象とするデータは以下のものとした。

①授業に関するアンケート

(実施回：#1,#15)

②小テストおよび総合テストの点数

(実施回：#2～#7,#10,#13～#14,#15)

### 3. 授業の内容

全15回の授業の内容は表2のとおりであり、このうち反転授業を実施したのは、合計8回であった。

表2 全15回の授業の内容

回	内容	予習または課題
1	ガイダンス、心理学的支援について	—
2	心理療法の歴史的背景 ※	動画
3	心理療法のモデル ※	動画
4	セラピストの3条件 ※	動画
5	傾聴について ※	文献を読む
6	心理療法の実際、病態水準 ※	動画
7	心理臨床的な関係性、面接記録について ※	動画
8	事例を聴く①(医療現場の事例)	—
9	事例の振り返り	事例の感想
10	面接記録演習	動画
11	事例を聴く②(箱庭療法の事例)	—
12	事例の振り返り	事例の感想
13	フロイトの精神分析療法 ※	動画
14	ユングの分析心理学 ※	動画
15	まとめと総合テスト	—

※は反転授業

### 4. 反転授業の方法

反転授業は以下の手順で実施した(表3)。

#### ① 予習動画の視聴

学生は次回の授業内容に関する20分程度の動画を視聴し、A4判の予習用のワークシート(以下、WSとする)に授業内容をまとめる。予習動画はTeamからダウンロードできない形式で授業の1週間前に教員(以下、筆者とする)より配信した。

#### ② 「予習WS」の確認(5分)

本授業は予習をしていなければ受講を認めないこととしているため、授業開始時に「予習WS」を回収

し、予習がされているかをチェックする(この「予習用 WS」は授業のディスカッション時に使用するため、すぐに学生に返却する)。

③小テストの実施(5分)

10 問程度の小テストを Forms に回答する形で実施する(得点は学生が回答を送信した直後に、本人に即通知される設定とした)。

④小テストの解説(20分)

小テストの解説を行う。この際に小テストの問題を紙面で配布し、解答や解説を記入しながら解説を聞くように指示する。また、予習動画のスライドも資料として配布する。筆者はこの解説時に、その日の内容のポイントとなる点について説明を加える。

⑤ディスカッション(45分)

その日のディスカッションのテーマが記載された「授業用 WS」を配布し、まず個人ワークとして自分の考えを記入してもらい(10 分)、その後、グループワークとしてグループディスカッションを行う(35分)。

グループ分けは、毎回、ランダムに番号札を配布し、その番号であらかじめ設定されたグループ(4~5 名ずつ)に分かれる方法をとった。

⑥まとめ(10分)

各グループの意見を、ジャンケンで決めた代表者が Teams のチャット欄にアップする。また、各自、自分の「授業用 WS」に自分の意見、グループの意見、授業の感想を書き、提出をする。

⑦次回の授業の説明(5分)

⑧授業後のフィードバック

Teams のチャット欄にアップされた各グループの意見について、筆者よりコメントを返す。場合によっては、次回の授業時により詳細な解説を行う。

上記の内容を整理した反転授業の流れを表 3 に示す。

表 3 反転授業の流れ

種別	内容	時間(分)	
予習	動画(20分程度)の視聴	—	
	→「予習WS」に動画の内容をまとめる	—	
授業	「予習WS」の確認・返却	5	
	小テストの実施	5	
	小テストの解説	20	
	ディスカッション	(準備)個人ワーク	10
		グループワーク	35
	まとめ	・意見を Teams にアップする ・授業の感想を書く	10
次回の予習内容の説明	5		
授業後	Teams にアップされた意見に、教員よりコメントを返す	—	

5. 反転授業を実施する前に受講学生へ行った説明

本受講学生は反転授業という形式の授業を受けるのが初めてであったため、#1 で全 15 回の授業全体の内容(表 2)を示した上で、以下(図 1、図 2)のスライドをもとに具体的な方法を説明した。

(1)授業の進め方

反転授業の特徴である、予習段階で知識の習得を行い、授業では予習で得た知識をもとにグループディスカッションを行うことを説明した。

### 授業の進め方

**[授業までにしておく予習]**  
 ・ Teams にアップされている動画(20分程度)を見て、動画の内容をワークシート (WS) にまとめる。  
 (WS は授業で配布しますが、Teams にもアップするの  
 で休んだ場合はそれを印刷して使用してください)  
**★この予習されたWSがなければ授業は受けられません。**

**[授業時]** (授業前: 動画のスライドを資料で配布、予習WSを一旦回収)  
 ①呼称による出席確認 (これ以降の遅刻は認めません)  
 ②動画の内容に関する小テスト (⇒その後予習WSを返却)  
 ③小テストの解説  
 ④授業内の課題について自分の考えをまとめる  
 ⑤④に関するグループディスカッション(3~4名)  
 ⑥ディスカッションの内容を踏まえた自分の考えをまとめる。  
 ⑦予習WS・授業WSの提出

知識の習得  
 知識をもとにした演習  
 反転授業

図 1 授業の進め方を説明したスライド

(2) 評価の方法

本授業は小テスト、WS の評価、総合テストから評価をすることを説明した。また、「予習 WS」と「授業 WS」の評価は、筆者が作成したループリックで行うことを説明した。

### 評価について

**★以下①~③について加点し、総合計の6割以上あれば単位修得**

①小テスト (1問1点で正解数を加点)  
 ②ワークシートの記載内容の評価 (基本的にA,B,Cで評価)

	予習	授業内
S (6点)	動画内容と関連する内容について自主的に調べられたことも含めた記載がされている	他者の意見を取り入れた独創的、発展的かつ具体的な意見
A (5点)	動画内容の押さえるべき点が記載されている	自分の意見が具体的に分かり易い形で書かれている
B (4点)	動画の内容の一部の記載であるが、前後のつながりなど分かり易い記載	自分なりの意見が書かれているが具体性については不十分
C (3点)	動画の内容のわずかな記載に留まっている	簡潔すぎる言葉のみで具体性の乏しい記載

③総合テスト (第15回に実施)  
 これまでの小テストの問題をそのままの形で50問出題します。30問以上正解しなければ、他の課題がすべてクリアされていても不可とします。

図 2 評価の方法を説明したスライド

(3) その他

その他、「予習 WS」へのまとめ方が分からなければ、動画の内容を簡条書きに書くという方法でもよいこと伝えた。また、このように反転授業という方法を導入することで、「自分で勉強する」「自分で考える」ということを目的としていることも併せて伝えた。

### Ⅲ. 結果

#### 1. アンケート結果

##### (1)反転授業説明時のアンケート(#1)

#1 の授業時に反転授業について説明したのちに、反転授業への取り組みに関するアンケートを実施した。

##### 1) 反転授業の説明を受けた感想

反転授業の説明を受けた直後の感想は、「とても興味をもった」「興味をもった」の合計が 19 名となり、大半の学生が興味をもったことが示された。一方で、「あまり興味をもてなかった」は 1 名、「興味をもてなかった」は 0 名であった。

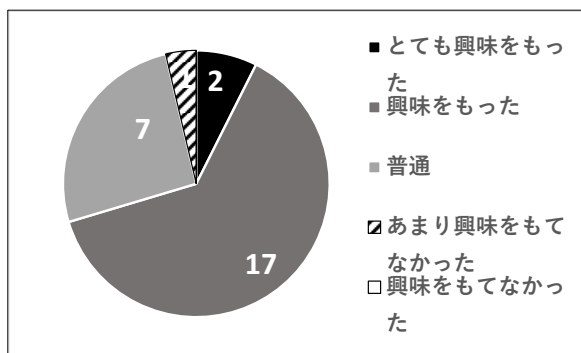


図 3 反転授業の説明を受けた感想(n=27)

##### 2) 「動画予習」の説明に関する感想

「動画予習」に関する具体的な説明直後の感想は、「問題なくできると思う」「多分できると思う」の合計が 25 名となり、ほとんどの学生が動画による予習ができそうであるとの感想をもった。一方で、「あまりできそうな気がしない」は 2 名、「できないと思う」は 0 名であった。

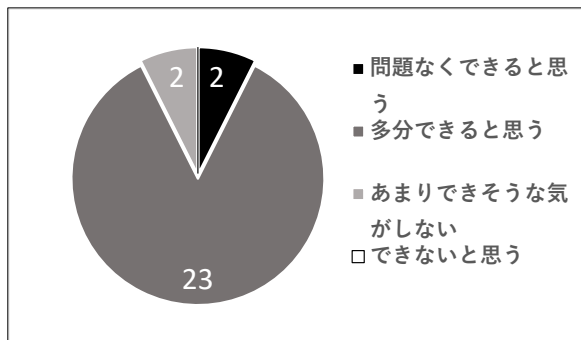


図 4 「動画予習」の説明に関する感想(n=27)

##### 3) 質問

その他、質問等について自由記述式で記入欄を設けたところ、以下の 2 点が得られた。

- ・提出した WS は手元に戻ってきますか
- ・受講学生で知り合いがないため、グループ分けは先生の方で決めてほしい

これらについて、WS はルーブリックを基準にした

点数をつけて毎回返却すること、グループ分けは教員の方でくじで行うことをフィードバックした。

##### (2)本授業終了後のアンケート(#15)

#15 の授業時に、反転授業を含んだ本授業全般に関するアンケートを行った。

##### 1) 15 回の授業で特に興味をもって取り組んだもの(複数回答)

15 回の全授業で特に興味をもって取り組んだものとして以下の回答が得られた(図 5)。

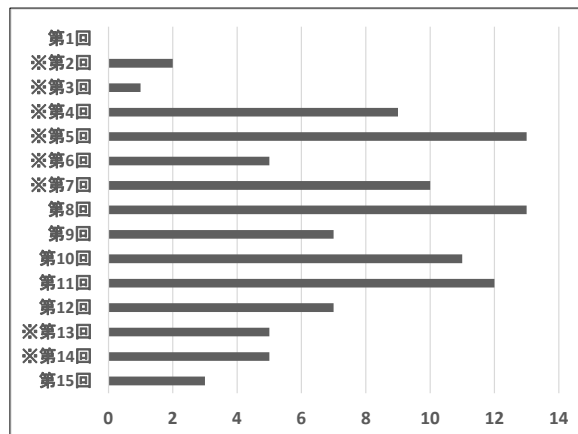


図 5 特に興味をもって取り組んだ授業(n=27)

※は反転授業

この中で、10 件以上の回答が得られたものを表 4 に抜粋した。

表 4 10 件以上の回答の授業内容(※反転授業)

回	内容	回答数
※第5回	傾聴について	13
第8回	事例を聴く①(医療現場の事例)	13
第11回	事例を聴く②(箱庭療法の事例)	12
第10回	面接記録(実践編)	11
※第7回	心理臨床的な関係性	10

図 5 と表 4 より、興味をもたれた授業は必ずしも反転授業であるわけではないことが示された。むしろ、実際の事例を聴く内容(第 8 回、第 11 回)や、ロールプレイを実際に見てその逐語記録を書くという(第 10 回)演習の内容そのものへの興味の多さもみられた。それでも反転授業によるもの(第 5 回、第 7 回)への回答も多く見られた点については、講義の授業においても演習的な内容の授業に比類するほどの興味を得るものであったのではないかととらえられた。

##### 2) 反転授業の内容で良かったもの(複数回答)

反転授業の内容で良かったものは、「動画の予習」が最も多く選択された。また、「小テスト」に 13 件の回答がみられたことから、予習内容のチェックも意味あることとして認識されていることが示された(図 6)。

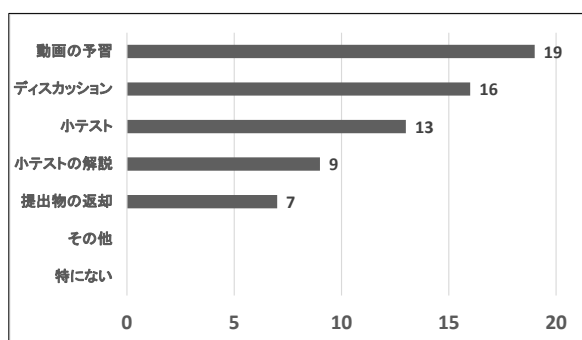


図 6 反転授業の内容で良かったもの(n=27)

### 3) 反転授業の内容で良くなかったもの(複数回答)

反転授業の内容で良くなかったものについて、良かったものと同様の項目で調べたところ、「特にない」が 24 件の他、「ディスカッション」が 2 件、「小テストの解説」が 1 件であった。

自由記述より、「グループ分けで同じ人にあたるのが何度もあった。もう少し、いろいろな人とディスカッションができれば良かった」との意見があった。グループ分けは、番号札を毎回ランダムに教員が配る形で行っていたが、同じメンバーの重複が起きていたようであった。

### 4) 反転授業の総合的な評価

反転授業を体験した総合的な評価について、「とても良かった」が 14 名、「良かった」が 11 名、「普通」が 2 名となり、「良くなかった」「全く良くなかった」は 0 名であった。

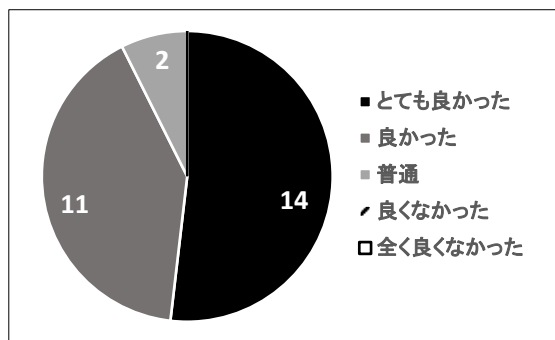


図 7 反転授業の総合的な評価(n=27)

これらの理由に以下のものがみられた。

- ・「新鮮だった」
- ・「動画の予習をすることで、あーこんなのあった、となることが多く、それが記憶から消えにくかった」
- ・「大変だと思ってたけど、小テストの時に想像以上に授業内容を覚えていることに気付き、意味があったと感じることができたから」

### 5) 本授業の感想

本授業の感想について、内容別に以下に示す。

#### ①反転授業について

- ・「予習復習にしっかり取り組める授業形態だったので、授業が深まりやすかったと感じた」
- ・「予習動画を見てからディスカッションをするので、ある程度全員がわかった上で話し合えるのはよかった」
- ・「動画を視聴する予習は今までしたことがなかったので、どうまとめたらいいんだろうかと悩んだこともあったが、回数を重ねるうちに自分なりのやり方が定まってきて、講義形式の授業の時より自分の考えを持つことが増えたので良かった」
- ・「予習プリントを集めて、小テストをして、解説を聞いて…と流れができていて、何が次にあるのかわかるようになってきたので、気持ち的にとても落ち着いて取り組めるようになった」

#### ②ディスカッションについて

- ・「自分は積極的に話し合いに参加したりするタイプではなかったのですが、予習や小テストなどがあったので、自分の考えをまとめることができ、積極的に発言できるようになった」
- ・「グループの割り振りによって、意欲的に発言してくれない人もいて、そのようなときは残念だった」

#### ③その他

- ・「最初はやっていけるかとても不安で、ディスカッションでも自分だけあまりいい意見を言えず、やりたくないなって思うことがあったが、1回も休まずに出ているうちにディスカッションにも慣れてきて、最後のテストでも高得点を取れて成長を感じた」
- ・「ディスカッションがあることで、ただ動画を見るだけでなく、自分の考えについて簡潔にまとめよう意識して予習に取り組むことができた」
- ・「正直大変で予習だけではしっかり理解できていないと気づくことがあって、小テストでいい点がとれないこともあった。それでも、苦手意識のあったディスカッションで自分なりに頑張って話せたのはよかった」

### 2. テストの得点

#### (1)小テストの得点

動画予習を実施した回において、授業開始時に小テストを行った。10 点満点の小テストの平均得点は、各回を通して 8.2~9.0 の間で推移しており、動画の内容がほぼ理解されているようであった。

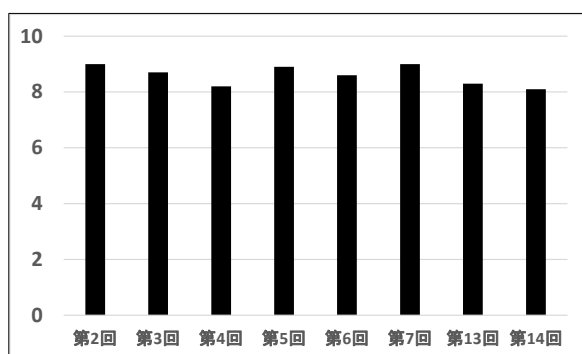


図8 各回の小テストの平均点(n=27)

## (2)総合テストの得点

第15回の授業時に、これまでの小テストの問題から50問を出題する総合テストを行った(1問1点)。この結果、 $48.4 \pm 2.9$ 点となった。実際の得点分布は1名のみ35点であり、その他の学生は47点～50点であった。

## IV. 考察

### 1. アンケートの結果より

アンケートは、#1で反転授業そのものに対する印象について、#15では実施後の感想等について回答を求めたが、ネガティブな意見はほとんどみられなかった。アンケート実施の際に学生には本アンケートが成績評価に関係しないことを伝えた上で行ったが、それでも多少なりとも授業内でやっていることが影響したのではないかと推察される。以上の点を踏まえた上で、得られた意見から以下に考察を行う。

#1で反転授業の方法を説明した後の感想として、大半の学生から「できる(これから取り組んで行ける)」と思うという反応が得られた(図3,図4)ことは、それ以降の授業の良い動機づけとなった。筆者自身も学生が「この授業ではどのようなことをするのか」ということが具体的にイメージできるような説明を心掛けた。また、評価の基準について明確に示したことも、上記の結果の一因になったのではないかと考えられる。

#15で行ったアンケートは、それまでの授業を振り返る内容であった。その中で、「反転授業の内容で良かったもの」について、「動画の予習」が最も多く選択された(図6)。自由記述の内容を参照すると、動画の予習をする過程で学生らがさまざまな試行錯誤をしていた様子がうかがわれた。たとえば、自分なりのまとめ方を考えたり、予習段階でディスカッションに向けた自分なりの考えを持つようになった、等である。また、授業の手順が明確にされていることもこれらの取り組みのルーティンを作ることに影響したのではないかと理解された。また、ディスカッションに対する学生らの得手不得手も感想からうかがえた。特に不得手の学生にとって

は、動画予習で他の学生と共通の知識を持っているという認識が、同じスタートラインでディスカッションを始められる安心感となったのではないかと推察された。

### 2. テストの結果より

小テストと総合テストは、Formsで回答した後即座に点数が出る設定としたので、学生は自分の点数を認識した上で授業に臨むことになった。小テストは動画の内容から出題され、総合テストはそれまでの小テストから出題されることを、学生は事前に伝えられていた。そのため、学生は十分にテストへの準備ができる状況であった。実際に学生の正解率は8～9割に至るものであったことから、ある程度の達成感は得られていたのではないかと推察された。

### 3. 臨床心理学関連科目の反転授業として

#### (1)授業の準備を通して

##### 1)予習動画の作成について

学生の予習課題として動画の内容をまとめる、というものを課していたため、動画は画面があまり速く次のスライドに移らないように(学生がじっくりとスライドを見てメモをしながら聞けるように)作成した。具体的には、可能な限り知識伝達する内容を図式化し、それらをたとえ話などを加えながら説明をする形式にした(5分程度/1スライド)。1回の予習動画は20分程度の長さにしたが、これに対して学生らからは特に「長い」という意見は出なかった。しかし、最初の動画予習による授業(#2)を終えたあと、ある学生より、「(教員が)動画で話す時の息が気になる」との意見があった。そのためそれ以降は、ポップガード(録音時の雑音をカットするアイテム)を使用して録音をするようにした。

##### 2)小テストの実施より

動画予習がある回は、毎回10問の小テストを実施したが、学生の感想に「予習動画をまとめながら、だんだんと小テストで出される問題が予想できるようになった」というコメントがみられた。動画を作成する立場としては、動画を作る際に、ポイントを絞りつつ具体例を挙げることを意識した。そのため、「小テストで出される問題が予想できるようになった」という学生のコメントは、すなわち、毎回の動画をポイントを押さえて視聴できるようになった、ということでもあろう。このことより、視覚情報と聴覚情報から知識を得る動画予習は、学生にとっては、ポイントを押さえた知識理解をしやすい学習ツールとなり、小テストと組み合わせることにより、学習の定着だけでなく、理解をしようとする意識づけにも有用となるのではないかと考察された。

##### 3)ディスカッションについて

ディスカッションについては、学生からの感想にも示されたようなディスカッションへの参加の積極性の

違いは、筆者にも認められた。また、1グループを4～5名のメンバーとしたが、くじでグループ分けをした際に、同じ人と複数回同じグループになったことが学生から「不満」としてあがった。そのため、グループ分けの仕方については、今後の検討事項となった。

その他、学生のディスカッションの取り組みについて最も顕著に認識されたこととして、次の2点が挙げられる。①動画予習と小テストにより事前に知識が入っているため、ディスカッションでの話し合いがスムーズに始まった(誰も話さないで時間が過ぎるという状況はほとんどみられなかった)。②しかし、あらかじめ意見が出た後は、それ以上に議論が深まる、という様子はあまりみられなかった。以上の①②で示されたディスカッションの様子は、次項に示すように臨床心理学関連科目で反転授業を行うことの意義に通じるのではないかと考えられる。

## (2)臨床心理学関連科目における反転授業の意義

吉田(2017)は授業において、講義法をアクティブラーニングの前に行う場合は、「教員が講義法によって提供した知識を学生に正確に定着させる」ために活用することが目的となるとしている。さらにこの場合の長所は「グループワークで論点が拡散せず、焦点を絞った議論ができる」とされ、短所は「グループワークが教員による講義法の影響を受けやすくなり、自由な発想での議論になりにくい」としている。前項で提示した①と②はこの知見を裏付ける現象であったのではないだろうか。すなわち、学生は動画予習により事前に得られていた知識があったため、焦点をしぼったディスカッションにすぐに入ることができた一方で、ディスカッションが予習された知識に限られることになり、さらなる議論の深まりや広がりに至らなかったのではないかとということである。

しかし、ディスカッションでは学生は、動画予習で学んだ臨床心理学関連の専門用語を即座に用いて話し合う様子が見られた。このことは、公認心理師資格のカリキュラム科目としての専門的な学びの過程としては重要な側面になる。このように、より専門的な科目を学ぶ臨床心理学関連科目に反転授業を取り入れることは、専門用語を実践的に活用した学びの機会になることになり、このことが意義になるのではないかと考えられた。

実際に、カウンセリングなどの心理臨床学的な支援場面では、クライアントや連携する専門職の人に専門用語を使用して説明等を行うことは推奨されない。むしろ、専門用語が意味するところを相手がわかりやすいような言葉にすることから、専門家としての関わりが始まる。このようなことを鑑みると、専門用語というものは、それを知り、理解したのちは、みずからの言葉と

してアウトプットをし続けることで、「生きた理解」になるものであるといえる。臨床心理学関連授業において反転授業を取り入れることは、専門的な知識を活用する機会を得るという意味において、有効な体験をもたらすことになるだろう。

## V. 今後の課題

今回の反転授業の取り組みを通して、全体的な授業の流れはとしては問題ないものであったのではないかと振り返られた。しかしながら、本稿の検討を通して、今後はディスカッションがより深まるようになるための授業方法上の工夫が必要となるのではないかと認識された。ディスカッション時のグループの決め方も検討すべき要因の一つとなった。また、予習のあり方についてもより詳細な検討が必要ではないかと考えられた。実際に学生が予習をどのように取り組んでいるか、という点を教員側が理解することで、学生に予習段階で「考える」という過程が生まれる方策を活用していくことができるのではないかと考えられたためである。そしてこの「考える」という過程が、授業時のディスカッションをより豊かなものにすることが期待される。

## 註

- 1) アメリカの精神科医サリヴァン(Sullivan, H.S)の提唱した概念。「対人関係の学」とされる精神医学において、「精神医学のデータは関与的観察をとおしてのみ獲得できる」という、観察者の自己を観察の道具とすることを説いている。本稿は臨床心理学の領域からの論考であるが、同様の立場に依っている。
- 2) 受講学生へは、本論文化の目的等、倫理的事項に関する説明をしたのち、書面にて承諾を得た。尚、承諾の有無が本授業の評価への影響はないことについて十分に説明を行った。

## 引用文献

- 藤田哲也・芳賀瑛・加藤みずき(2018)心理学測定法の反転授業に対して学生はどう受け止めたかⅡ。日本心理学会第82回大会, 939.
- 河合隼雄(1995)“第1章 臨床心理学概説”。臨床心理学1 原理・理論。河合隼雄(監修)。山中康裕・森野礼一・村山正治。3-26。創元社, 大阪。
- Lage, M. J., Platt, G. J., & Treglia, M. (2000) Inverting the classroom: A gateway to creating an inclusive learning environment. *Journal of Economic Education*, 31(1), 30-43.
- 溝上慎一(2014)アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換。東信堂, 東京。
- 溝上慎一(2017)“アクティブラーニング型授業としての反転授業”。アクティブラーニング型授業としての

- 反転授業 [理論編]. 森朋子・溝上慎一. 1-15,ナカニシヤ出版,京都.
- 島田英明(2017)大学授業科目「心理学実験」における反転授業の実践. 第6回日本デジタル教科書学会発表予稿集. 6,53-54.
- Sullivan,H.S. (1954) The Psychiatric Interview. W.W.Norton & Company Inc., New York.(中井久夫・松川周二・秋山剛・宮崎隆吉・野口昌也・山口直彦共訳(1986)精神医学的面接. みすず書房,東京.)
- 高石浩一(2021)コロナ時代の心理学教育—主に「心理学概論」「心理療法学」「心理的アセスメントの理論と実践」の実践から—臨床心理学部研究報告. 第13集,91-100.
- 吉田墨(2017)“アクティブラーニングを組み合わせる”. 講義法(シリーズ・大学の教授法,2).佐藤浩章(編著).150-152.玉川大学出版部,東京.